

対馬アクション・リサーチ合宿の目的

阿部 治

はじめに

私はこれまでも立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科の担当教員として、フィールドワークショップ科目の場として対馬市を対象にしてきました。今回の対馬市との連携協定を機に本学学生のESDの場として活用させていただくと同時に、本地域創生研究プロジェクトを通じて、対馬市の地域創生に資する具体的な研究活動を展開していきます。特に対馬市で課題となっている学校統廃合問題に焦点を当て、以下の目的を掲げ、学生を含めて継続的な調査を対馬市で組織していきます。

研究背景・問題の所在

地域社会において学校は、授業や行事、地域活動を通じて、学区内の人的資源（資本）や自然資源（資本）、歴史・文化資源（資本）などの見える化・つなぐ化に大きな役割を果たしてきました。また同時に学校は地域の過去・現在・未来をつなぐ存在でもあります。特に、地域の子どもに対する教育活動が学校教育、学校外教育においても地域の社会関係資本との密接なかかわりのもとでなされてきました。また、学校の持つ学びの効果は、子どもの成長だけではなく、地域の大人たちの成長をも促し、両者の相互作用から生み出される社会への信頼と地域の誇りの醸成は、地域社会の持続可能性に大きく関わっています。すなわち、地域のサステナビリティの視点からみると、学校はあらゆるものをつなぐ装置としての機能をはたしてきたのです。

このように、学校が地域社会で有する機能は多面的であり、重層的なものです。しかしながら、今日の農山村での過疎化に伴う人口減少の下、全国的に学校の統廃合が実施されています。このような状況の下、前述した学校が地域社会において果たす役割をどのように維持していくのが大きな問題となっています。とくにコミュニティの基本単位とも重なる小学校区においては、学校の存在が地域のサステナビリティにとって決定的に重要です。

調査の目的

そこで本調査では、まずは学校が地域のつなぎ役としてどのように機能している（してきた）のかを持続可能性の視点を含め様々な視点から明らかにしていきます。そしてさらに学校の統廃合が地域にもたらす影響や問題について明らかにします。

ただし、本調査の目的は1回の調査で明らかになるようなものではなく、継続的に行うことで見えてくるものと考えています。まずは初年度に参加した院生・学生の言葉をとおして、以下、調査のまとめを行いました。